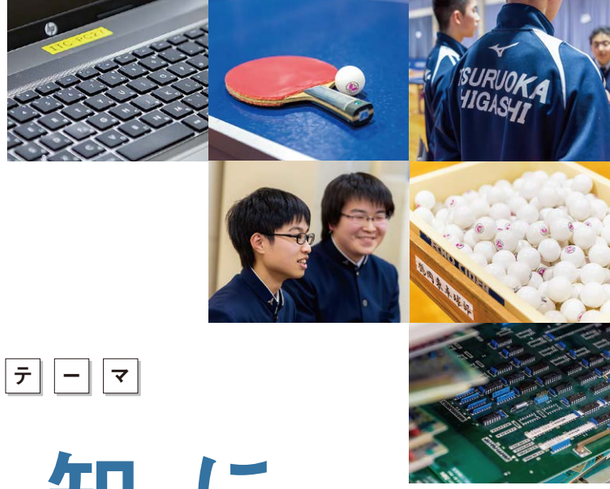
Cradle
高校生編集部が行く
スゴハイ 24
SUGOI high school students in Shonai

Supported by
庄内広域行政組合、山形県庄内総合支庁



取材テーマ

知に込む 未飛び校生 高

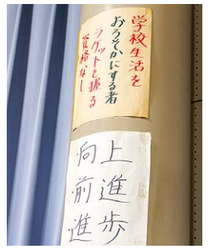
もっと強くなりたい。
地域が喜ぶことを形にしたい。
そんな想いを胸に、知らない土地へ、
新たな学びへ飛び込み、
走り続ける高校生を紹介します。

鶴岡東高校男子卓球部

1月から2月にかけて福島県郡山市で行われた、東北高等学校選抜卓球大会で優勝、見事6連覇を成し遂げた鶴岡東高校男子卓球部。現在、県高校総体14連覇中、東北高校総体5連覇中で、インターハイでは一昨年準優勝、昨年第3位という成績を収める強豪だ。これまでに全国高体連の日本代表選手も数名輩出している、その強さの秘密を探るべく練習場に伺った。

高速のラリーも、ずっと続くのではないかと思えるほど乱れることがない。

まず目に飛び込んできたのは、壁面に貼られたさまざまな言葉。「練習中いつでも目に入るように、部員全員がそれぞれに目標を書いて貼っているんです」と話すのは2年生の小松隼大さん。「課題を克服するため、技術に磨きをかけるため、常に意識を高めて練習に取り組む必要がある」と考え、「意識」と掲げている。1年生の高橋響生さんが掲げるのは、「練習で自分を追い込む」という言葉。「練習から全力を出し切ることではじめて、体と心が鍛えられ、試合でも自分の力を出し切れるようになると考え、この言葉を選びました。さらに、練習中の各人の足下には、力強く「平常心」と書かれたノートが広げられていた。ミスをしても落ち着いて立て直し、必ず勝利をつかみとる。そんな願いをこめたチームとしての合言葉だという。



壁面には、卓球選手としてはもちろん、人としての心構えを示す言葉も掲げている。

卓球を通じ、真の「強い人」に。

日々切磋琢磨し合う男子卓球部の精鋭たち。(左から)1年生の芳賀世蓮(せれん)さん、藤根大輔さん、髙橋響生(ひびき)さん、櫻井倭(やまと)さん、2年生の矢島陸斗さん、小松隼大(はやと)さん。

「人間力の向上」。鶴岡東高校で卓球をすることで得られる一番の学びについて尋ねると、2人からは同じ言葉が返ってきた。「挨拶や試合会場でのマナーなど、礼儀についても厳しく指導していただいています。技術面や体力面はもちろんですが、人としても成長できていることが、チームの強さにつながっていると感じています」。

故郷を離れ、人として、卓球選手として鶴岡の地で成長を続ける彼らを、地域全体で応援していきたい。

(取材:鶴岡南高校文芸部)

どんな厳しさにも立ち向かう強い気持ちは、日々の練習とたくさんの言葉に育まれたものだ。

鶴岡工業高等学校

起業に挑戦する人材の育成を目指し、山形大学が他大学と協働し取り組む「EDGE-NEXT」。2019年2月に山形大学と連携協定を締結した鶴岡工業高校では、有志の生徒約30名が参加し、講義やワークショップで起業について学びながら課題研究に取り組んでいる。

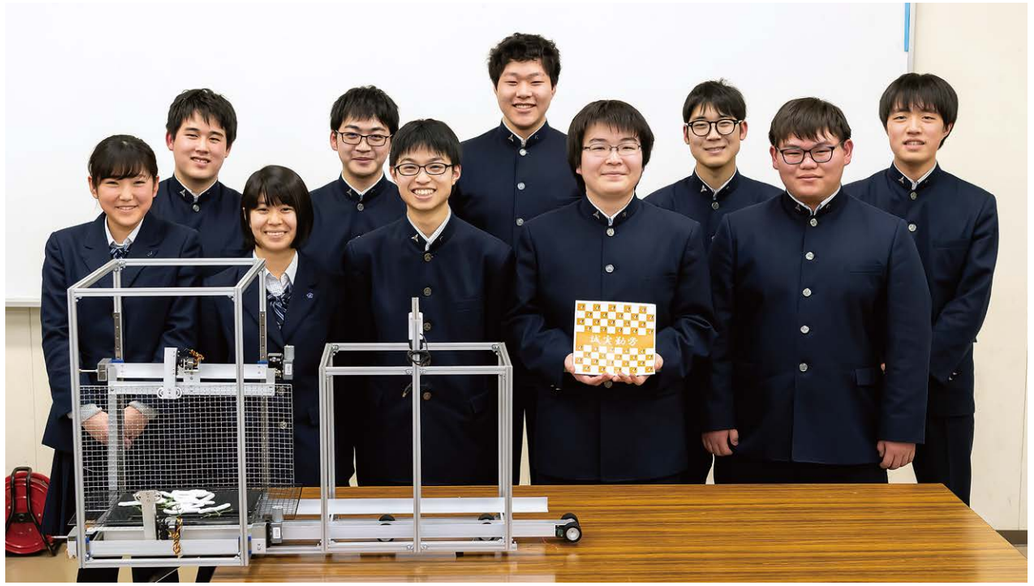
研究の共通テーマは、鶴岡市の絹産業。旧庄内藩士たちが土地を開墾し地域の一大産業として育て上げたこと、養蚕から織りまでの全工程を一貫して行う国内唯一の地であること、日本遺産に認定されていること。「鶴岡にこんな産業があるなんて、知らなかった」と、参加者の榎本大輝さんと齊藤優希さんは口をそろえる。

記念チーフのデザイン案。今後より多くの人に使っていただけるよう、ブラッシュアップを進めていく予定だ。

榎本さんのチームは「シルクチーフ製作を通した情報発信」と題し、創立100周年記念チーフの製作と映像教材・プロモーションビデオづくりに取り組む。個別テーマ選定にあたり調査を重ねる中で、シルクをはじめとしたさまざまな地域の魅力に気がつき、「知る」ことが地域課題の解決につながるのではないかと考えた。

「鶴岡シルクの魅力を発信することで、人口流出を防げないかと考えました。地域を知ることで愛着が生まれ、暮らし続けていきたいと思う。そのきっかけになればいいなと思います」。

発見の喜びを新たな挑戦の力に。



EDGE-NEXTに参加し、「シルクチーフ製作を通した情報発信」「自動養蚕工場」の課題研究を行う（前列左から後列右）本間有貴さん、齋藤美典（みのり）さん、齊藤優希さん、榎本大輝さん、五十嵐鼓太（こた）さん、加藤彰人さん、島田雷覇（らいは）さん、佐藤塁さん、須藤悠太さん、伊藤祐哉さん。両チームとも全員3年生だが、EDGE-NEXTには1年生と2年生も参加可能だ。

齊藤さんのチームは、養蚕農家の負担を軽減することで後継者不足を解消し、鶴岡シルクにかつての勢いを取り戻したいと考えた。養蚕現場に足を運び、自分たちでも蚕を育てながら、養蚕作業の自動化装置「自動養蚕工場」の開発に取り組む。「蚕が一生のうちに摂取する桑の葉の88%を食べる5齢と呼ばれる時期には、頻繁な確認と葉の補充が必要です。画像認識ソフトを使ったプログラムで補充の要否を判断し、葉の補充と食べ残した茎や糞の除去を自動で行う仕組みを構築しました。装置の機構は養蚕現場の既存の方法に倣ったものですが、プログラミングと装置の設計・製作はゼロから行いました」。

自ら課題を設定し、能動的に調べ、考えていくことがとてもおもしろかったという2人。卒業後は進学し、榎本さんはゲーム制作を、齊藤さんは情報工学を学ぶという。

自動養蚕工場チームが製作した装置。上部のカメラで取得した画像を解析し、葉の補給と掃除を行う優れものだ。

「起業は中学の頃からの夢で、大学在学中に会社を立ち上げるという明確な目標ができました」と榎本さん。「『何度失敗しても、成功するまで続ければ失敗ではなくなる』という言葉に触れ、起業に対するネガティブな印象を払拭できました。現時点で起業は考えていませんが、友人が起業したいと言い出したら、経験を活かして全力で応援します」と齊藤さんは話す。鶴岡ならではの事業を立ち上げるのは榎本さんのようなOBOGか、研究を引き継ぐ後輩たちか、いずれにしても今後が楽しみな取り組みである。

（取材：鶴岡中央高校学習センター委員）

編集後記

私は、中学まで卓球部に所属していました。練習を間近で見せていただき、基礎のレベルの高さ、真剣な眼差しやテキパキとした行動など、東高男子卓球部の強さの理由を肌で感じることができました。みなさんの熱意と努力に触れ、自分も好きなこと、すべきことへ全力で取り組みたいと思いました。（鶴南・まゆ）

●

関連事項にも触れながら、ときにユーモアを交えて答えていただき、楽しくお話を聞くことができました。そのような受け答えができるのは、熱意を持って取り組んでいる証拠でもあると感じました。自校の強みを活かす形で特産品のシルクの活用・研究を行うことで、自校と地域、両方の魅力発信を実現している点が素晴らしいなと思いました。（鶴中央学習センター委員）

編集部員&特ダネ まだまだ募集中！

「スゴハイ」の企画制作をやってみたい高校生、「こんなスゴい高校生知ってる」「私、スゴいんです」などスゴい高校生の情報は随時募集中です。お気軽にご連絡ください。

ご応募・お問い合わせ先
Cradle事務局
info@cradle-ds.jp

編集・文＝Cradle高校生編集部、工藤 拓也
写真＝間 真由美
協力＝鶴岡東高等学校、鶴岡工業高等学校、鶴岡南高等学校、鶴岡中央高等学校